

創立五十周年記念シンポジウム

## パネルディスカッション

高佐（以下「司会」）では、三先生にご議論を交えていただく時間を取らせていただきます。こういう折というのは、司会者が、それぞれの先生方の講演を手際よくまとめ、そこから論点をうまくつまみ上げて、それをシンポジストの方に振るといというのが一番いいかと思うのですが、私も現宗研の主任をさせていただいて七年半ぐらいになり、こうした機会もずいぶんと経験させていただいて参りましたが、正直、今日ぐらい困っていることはございません。お二人ずつの先生方の共通項を見つけることは、どうにかできるのですけれど、三先生に同じように振れる設問というのがうまく見つけられていないというのが実情でございます。こういうときには、シンポジストの方に振ってしまおうのがよいかと思います。

何しろ、三先生は朝十時から、ずっとこの会場にいてくださいます。ご自身のお話をされるだけではなく、それぞれの先生方のご講演を聞いて、今この場に臨んでいただいております。先ほどのご講演は七十分という時間の制約がありましたから、お話しし損ねてしまったこと、他の講師の先生のお話を拝聴されて、何か啓発されたこと、ご関心を持たれたこと、あるいはコメントされたことなどがおありになったら、そのことからお話をいただければと存じます。たいへん厚かましい、ずるいお願いで恐縮ございますが、片山先生からお願いできますでしょうか。

片山 はい、わかりました。最初に前段階の補足のようなことでなくて、私の実家が岡山の日蓮宗不受不施派

だという話をさつき申し上げましたが、大事なことを言い忘れてました。私の妻の実家は日蓮宗でありまして、不受不施派ではなくて、皆さんと同じ日蓮宗であります。鳥取県の米子に感応寺というお寺がありまして、その檀家です。夏に妻の実家の法事があったものですから、私も感応寺に行つて住職さんのお話を伺つたんですけれども、通り一遍ではなくて、非常にユニークなお話で感銘を受けたということを、まず報告をさせていただきます。

**司会** ここで口を差し挟むのは恐縮ですが、お昼に伺いましたところ、先ほどおじい様とお話しになっていたのは、お父様のお父様だそうでございますから、先生の直系と言いますか、片山家代々のお墓が、その不受不施派のお寺のことだそうでございます。

**片山** はい、ありがとうございます。私、先ほど「五十年後の日本」ということでいくつかの話をいたしました。特に、地域経済と地域が衰退をして人が減ってしまうという背景と原因をお話したんですが、もう一つ大事なことは、政治の将来もあるわけです。ちょっとなかなか言いにくいのですけれども、今、政治がいささか劣化してきている、と私は危惧と懸念を持っております。俗にポピュリズムと言ったりするんですけれども、これは、迎合主義と訳したりします。本来ポピュリズムというのは、ピールと同じ語源ですから、実は民主主義と淵源は一緒なんです。人々の考え方を汲み取つて政治を行うということは民主主義の原点です。それがちょっと名前を変えて、もともと、ピールと語源を一にするのに、ポピュリズムとかポピュリストって話になりますと、非常に軽佻浮薄で右往左往してつていうことになり、その悪い方のポピュリズム的傾向がかなり強くなつていっている感じがしています。

それぞれの政治家を見た場合に、例えば深く思慮が感じられて、その時々々の情勢の変化に応じてもろろいろいろな変わり方はするけれども、やはり一本筋がきちつと通つていて、そのことについては信頼が寄せられるという政治家

が、私は必要だと思えます。けれども、何かころころ変わってみたい、ついこの間言ってたことと今度言ってることが違ったりしている。それから、さっき言った民主主義というのは、国民の意見に耳を傾けてそれと対話をしながら物事を議論によって進めていく。説得をしたり説得をされたり、自分が譲歩したり相手に譲歩してもらったりと、これが民主主義の基本なんですけれども、そういうことは関係なく、議論と関係なく、もうどうであろうとさっさかさっさか進めていく、というようなこと。いろんなことが気になるんですね。

私は、過去の政治家のことを思い浮かべて、一番尊敬しているのは石橋湛山先生なんです。この方の書いた本をよく読んでるんです。今また読み返してみると、一九二〇年代とか三〇年代、振り返って見ると日本が非常に危機的な時期だったわけですけど、そのときに、時代に流されないで的確な政治評論をされてるんです。今読んでも、実に新鮮であります。また、時代状況がいささか当時と今日と似通ったところがありまして、当時のことをきちっと評論されてるんだけど、今のことを評論してると思えるかのような、今の時代に読んで的確な政治評論なんです。こういう石橋湛山先生なんかの業績を振り返ると、しっかりと本を読んでいる、ものを考えてるっていうことと同時に、やはり一つ宗教が、日蓮宗があったわけです。

ですから、今日たまたまこういう席にお邪魔させていただいて、今の政治家というか、今の政治の状況を見たときに、やっぱり足らざるものがある、その一つは読書、本をきちっと読むということなんです、もう一つはやはり沈思黙考。宗教でなくても私はいいとは思いますが、例えば宗教を自分のものにして、目先のことに捉われないでちゃんと遠くを見て、それを指標にしながら進んでいくということが大事なんではないかなという気がします。

ゲートという人がいますが、この人がかつて、「この頃の人は、富と時間ばかりをもっともっと欲しがると、「困ったものだ」と、こういうことを言っています。「この頃の人は」とは、ゲートの生きた時代の事ですが、今の時代も、もう考えてみたら政治とかいろんな世の中のことを見ると、ほんとに富と時間ばかりを求めてるのは今も変わ

らないなど思います。グローバル経済とかTPPとか法人税減税とか、これはあくなき富を求める作業ですし、リニア新幹線なんてのは時間を求める作業ですが、ゲートは、「それではいけないので、やっぱりもつと違うものがあるでしょ。大事なことがあるでしょ」ってことを言いたかったわけです。

私もまったく同感でありまして、もつと人の心とか社会貢献とか、社会貢献をしながら自己実現をするとか、そういうことが社会全体にも必要だし、本当はリーダーとして政治家なんかがそういう考え方を持たなきゃいけない。そのためには、さっき言った本を読むとか、自分でものを考えるときか、宗教的バックボーンがあった方がいいとか、そんなことを実は考えておりました、今日、時間がありましたら前段のところでもそんな話を差し上げようと思ったんですけども、いい機会を与えていただきました。ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。八代先生や古河先生の講義へのコメントはいかがですか。

片山 古河先生の話を知って、違う大学ですけど、やはり同じく大学に身を置いているものですから、大学が今置かれてる非常に世俗的問題を、「ああ、やっぱり、先生も共有されてるんだな」と思いました。私の方は、大学の中でも一介の教授ですから、経営とかマネージメントに携わっておりませんので、気が楽でありまして、あまり深刻には受け止めてないんですけども、私のところのトップも同じだろうと思えますが、やはりトップに立たれると非常に大変だな。特に将来を見据えて大学のこれからの礎を作っていくかなきゃいけないんだなど、今日はそういう面、少しご同情と感銘を受けながら伺ってありました。

司会 ありがとうございます。では、八代先生お願いします。お一人だけいわゆる理科系の分野からということ

ございますけれど、講師紹介であまり申し上げませんでした。理科系・文化系というような壁をやすやすと乗り越えられて研究をされてるといふ感が、とても八代先生の場合は強うございます。詳しくは、先ほど紹介したご著書などに譲らせていただきますけれど、SFでありますとか、そういったものにも造詣が深かったりされるようでございます。すいません、余計なことを申し上げました。

八代 今日是一片山先生、古河先生のお話を伺っていて、やっぱり考えていたのは、よく使われる言葉として、大学において純粹学問・基礎学問をどうするのか、なおかつ、役に立つような人材をどう育てるかという話が出ているわけですね。最近、インターネットなんかでは、L型人材とG型人材、ローカルとグローバルで、L型人材は、大学で教えるのはワードとか教えればいいみたいな世界の話をしているんですけども、はてさて、地方にとって本当にそれは役に立つ人材であろうか。今であれば工業系であれば高専つてもものもありますし、ビジネスであれば専門学校とかがたくさんあるわけなので、本当に地方を支えてくれる人材というものの教育、あるいは人間の心を支えるためのも不謹慎ではあるんですけども、この間の文科省の設置審では、幸福の科学大学が一応設置認可が下りなかったという話もあって、「じゃあ、今の伝統宗教の設置審におけるお話はどうだったのか」っていうところも考えると、本当に必要な知というのは何なんだろうなという、非常に結論の出ない、漠然としたお話を、両先生のお話を聞きながら少し考えたところではありました。

司会 ありがとうございます。古河理事長、いかがですか。

古河 今、片山先生から石橋湛山先生のお話が出ましたが、立正大学の第十六代の学長をお務めいただきまして、当時立正大学も大変厳しい状況だった中で、大学を復興、立て直していただいた。そういうことで、石橋湛山先生によるところのご功績は、実に大なるものがあります。一昨年は立正大学の百四十周年。そのときに石橋湛山先生の「石橋湛山展」も行いました。石橋先生も実は法華経の信仰者でいらして、こういう言葉が残ってるんですね。当時の立正大学ですが、「立正大学は建物や設備はあまり良くないんだけど、日本一の大学にする」。それはどういう意味かというところ、「日蓮聖人の立正安国の精神を掲げて、社会に貢献できるような大学なんだ。そういう立正精神を掲げた大学である」ということで、日本一の大学にするんだ」というお言葉が残っております。まさに建学の精神というのはそういうものだと思います。大学の名前には時代の名称ですとか、地名を付けた大学とかいろいろありますが、うちの大学では日蓮聖人の『立正安国論』の「立正」というもの、そういった精神そのものを冠した大学である。このことを大事にしたいと思っております。

もう一つは、八代先生はお話のまとめの中で、最後に宗教のこともちゃんと語ってくださいまして、心の杖となるようなものであってほしいというふうにございました。まさに私の「お寺の本来のあり方」という話の中で、生老病死を受け止め支えていくようなお寺でありたい。その辺は同じような思いだったんだということで、大変嬉しく思いました。

もう一点、これもまたちょっと違う話ですが、私と一部の方々の方々の構想なんです、熊谷キャンパスで自然栽培農法を研究して発信していこうじゃないかという思いを持っております。その先頭に立っていただいているのは、本学の客員教授になっていただきました高野誠鮮さんです。高野さんは日蓮宗の僧侶であり、『ローマ法王に米を食べさせた男』で知られる方です。この方が、いわゆる肥料・農薬・除草剤を使わない自然栽培農法というものを研究し、それを実践していったらどうだろう。それを立正大学から発信しようじゃないかということで、私も大いに感銘を受けま

して、先月は埼玉県の知事さんにもお会いしに行ったりもしました。

今月の二日に、熊谷キャンパスで高野誠鮮さんと、「奇跡のリンゴ」で知られる青森県の木村秋則さん、ご存じでしょうか、この方に来ていただいて講演をしてもらいました。「ヒトもモノも本物は腐らない」というテーマです。つまり、奇跡のリンゴは腐らないんですね。そういう、本来の自然栽培農法によるものはどうなのか、という話をしていただいたのですが、その中で、世の中には腐っている坊さんが多すぎるといような発言がありました。何か私のことを言われているのかなというふうに思いましたが、いずれにしても、できれば熊谷キャンパスを、国内、あるいはアジアに向けて、自然栽培農法を発信できるような拠点にできればいいなという、構想を持っております。われはやっぱり夢を持って取り組んでいきたい、と思っておりますので、そんなことを考えています。

それから一方では、地方の友人の話を知ると、本当にお寺が大変なんだということを知っています。今日のお話は非常に大ざっぱなお話ですから、その辺の話は、本当に真剣に関係の方たちとともに考えていかなきゃいけない話題だと思っています。

**司会** ありがとうございます。八代先生が人材論に触れてくださいましたので、「これで共通の話題を組上に載せていただいた」と、進行役として安堵したところでございます。片山先生へのフロアからの質問も、「グローバル人材とローカル人材」というお話に集中しているところがございます。グローバル人材という耳触りのいい表現の軽佻浮薄さのようなものを批判されながら、あえてああいう刺激的な言い方をされたのではないかと思えます。

先生は先ほど、「ローカル人材が必要ではないか」と仰っておられましたけれども、具体的にはどういう人材がこれから日本なり、国家なり、社会なりを担っていくために必要だといふふうにお考えでしょうか。そのために今、知的立国、あるいは教育立国というお言葉を使われていらっしゃるかもしれませんが、おそらくそういう人たちを育ててい

て、そういう人たちが担っていくのが知的立国であり、教育立国でありというようなことになっていくんであるというふうに思います。ある意味で、お三方とも大学人でいらつしやいますので、そういう形での人材論というようなことで、それぞれの先生方にお考え、コメントをいただきたいと思えます。

八代先生には、それに加えてと言いましようか、今日、ホテルからこちらへご一緒するときの車中でも、例のSTAP細胞の話が出ましたが、今年はあるなこともあって、科学者への信頼というものが、世間からやや失われているような状況があるのではないかと思います。そのようなことに対する危機感というようなものがおありになるならばお聞きしたいというフロアからの質問があります。そんなことも踏まえながら、人材論についてのお考えを伺えますでしょうか。、あるいはまさにiPS細胞の研究を進めていくということについて、日本国は国家事業としてプッシュして、科学技術立国、あるいは医療立国みたいなものを、iPS細胞を通じてやっていこうというような意図を、何となく素人である私どもは感じたりするのですけれども、そういったようなことについて、どんなお考えをお持ちでしょうか。

古河理事長には、お考えになっている、「かくあるべし」という、人材についてのことを縷々ご講演の中でご説明をいただいたのではございますけれども、さらに、今、理事長の前に片山先生と八代先生にご発言をいただきますので、そのご発言を受けて、またご意見をいただければというふうに思います。それでは、片山先生からお願いをいたします。

片山 今の問題提起に対しては、二つの観点からお話します。まさに日本の将来、五十年後に関わることなんですけれども、私はやはり、われわれの住むこれからの日本の国柄としては、知的立国でありたいと思ってます。知的立国って何ですかというと、いくつか内容はありますが、一つは、やはり日本としては科学技術を重んじる、そういう国

柄でありたい。それからもう一つは文化芸術に日常的に親しむ。そういう心豊かな国民も形成する国柄でありたい。こういう科学技術を重んじて文化芸術にも親しむということになると、それを担う人材が必要ですから、当然それは教育を重んじる。そういう国柄だと思います。科学技術をまっとうに発展させて、文化芸術に国民が親しめて、かつ教育を重んじるためには、政治というのはそれこそ民主主義的でないといけませんし、具体的に言うくと、政治は透明でなければいけない。そういうった中で、必要なところに財政が的確に配分される。これが理想的な国柄だろうと思っております。

そういう国柄の中で、どんな人が必要なのかというと、昨今しきりに言われるのがグローバル人材です。みんなが「グローバル人材、グローバル人材」といつて走り回って、私のところのゼミの学生なんかも、やはり就活に行くところグローバル人材だということと言われる。ゼミで「グローバル人材って何だろうね」ということを、ときおり話をするんですけど、明確な定義はないんですね。何となく英語がしゃべれて、外国人と英語でコミュニケーションができるというのが、グローバル人材なのかなというような印象を受けてます。でも、英語だけしゃべればグローバルと言うかどうかはともかくとして、それで本当に有能な人材なのかということ、やっぱりちょっと疑問があると思います。

英語がしゃべれるに越したことはないですが、これから一番必要なのはやはり、きちつと自分でものが考えられる人。しかも公正にものが考えられる、我さえよければじゃなくて。もちろん自分のことも大切にしなければいけないし、身の回りのことも大切にしなければいけない。でも、同様に相手の立場、相手の利害にも公正な目を向けられる。そういう意味でのきちつとものが考えられる人。洞察力がある人。相手を理解し、共感を持つことができる人。そういう人でなければいけないと思うんです。「英語はしゃべれるけれども、相手に対する理解力とか共感力がまったくありません」、なんていうと、コミュニケーションはたぶん無理だろうと思うんですね。

では、そういう、自分のことももちろん大切にされるけれど、他者に対して共感することができるとは違う。育つんだらうかという、例えば考える力ということなら、本を読む、読書ということがやはり基本になると思います。それから、心の問題になると例えば文化芸術、これが非常に重要だと思えます。昨今、とかく芸術科目なんかは学校教育の中ではかなり肩身が狭くなっていまして、音楽とか美術とか、地方に行くとかかけ持ちで教校を一人の先生が持ち回ってるみたいなこともあるんですね。書道に至ってはもう先生がいらない。そんなことでは本当はいけなくて、一番重視しなきゃいけないのはそういう科目だと思えます。なぜならば、創造力についてさっきの講演でもお話ししましたが、イメージーションじゃなくてクリエイティブの方の、ものを作り上げていくっていう創造力なんですけど、これを養おうと思つたら、芸術科目が一番大切だろうと思えますね。

といいますのは、例えば絵を描くっていうことを考えれば、白いキャンバスに一から自分で作っていくわけですね。ゼロというか、紙はありますけど、無のところ自分で創造していくわけです。音楽も何も無いところ、静寂の中に自分が楽器を演奏したり声を発して歌を歌ったりして、空気の振動ですけど、それを作り出してきれいな歌声とか、きれいな音楽をそこで醸し出すわけで、これも創造です。造り上げていくわけですね。書道も、白い紙に最初から始めて自分で作品を造り上げていくわけで、これは、自らが最初からものを造り上げていく、創造する力の原点だろうと思えますね。こういうところを蔑ろにして、暗記みたいなことばかりやる。暗記も当然必要なんですけど、一方で、一番大事な物事を造り上げていくところを蔑ろにしてるっていうのは、いささか問題があるだろうと思っています。

私は鳥取県の知事有的时候、「芸術科目、ちゃんとやろうね」と教育委員会に話をしまして、書道の先生がいなくていいこともあったものだから、県の教員として書道の先生を採用したんです。そうしたら、もうびっくりしたんですけど、日本書道連盟からお礼に来られまして、「書道の先生を採用してくれる県は鳥取県だけです」とお話し

やるんですね。そういうことではいけない。美術なんかも当時、正直言って鳥取県も掛け持ちで、しかも非常勤講師だったんですけど、ちゃんとそれを正規の先生にして、できるだけ一校一人は置こうということをやったんです。

それがにわかになどれほどの教育的効果を生むかというのは、これはわかりません。教育はもつとずっと長い、将来に成果が出るか出ないか、それすらわからないような作業ですけれども、そういうことは大切だろうと思ってやっています。日本全体として、そういう、人を育てるときに大事なものを、今の受験競争の中で、偏差値偏重の教育の枠組みの中で、やっぱり軽視しているのではないか。それが日本の国柄にポディーブローのようにじわっと効いてくる。本来の意味の創造力、ものを造り上げていく力の減退とか、人の心をちゃんと汲み取る、それに寄り添うという「共感する力」が、やはり薄れてきている。端的に今現れているのが、政治の劣化で、政治家たちがそういう世代になっているんだらうなど、私も政治家の人たちと接してつくづく思うんです。ですから、私が言ったグローバル人材よりもローカル人材っていうのは、突きつめて言えばそういうことでもあります。

司会 ありがとうございます。八代先生、お願いします。

八代 むずかしいですね。

司会 人材論の方がむずかしければ、答えやすい方の問題でも結構でございます。

八代 人材論の話のところもそうなんですけれども、基本的に人材はやはり教育から始まるというのは、僕もまったくの同意見です。個人的に思っているのは、今、片山先生から偏差値偏重の受験がよくなかったというのも出たんで

すが、ものによってはやっぱり覚えなければしょうがないというものも存在はしていますね。ただ、それを血肉に変えることってというのができてなかったのかなという気はしています。というのは、受験教育というか、理化学教育の場合は、結局のところ知らなきゃ始まらないところがどうしてもあります。それは、暗記をすることはもちろん必要なんですけど、ただ、中学校でも小学校でも高校でも、理科教育の中で実験ということをやるわけですけど、結局あれは先生が組んでしまうっていうところが一番問題なんです。ですから、実習とかそういうものではなくて、組む自分で、「じゃあ、この結論を導くためには何が必要なのかな」というところを、やっぱり組まないとしようがない。

つまりそれは何かと言うと、そこにつながって来るのは日本の科学研究というか、科学に対するリテラシーですね。そういうものにつながって来る。そこから出てくるのは結局、S T A P細胞とかの話でもそこにつながるんですけども。基本的にS T A P問題で言えば、科学というのも一つの人間の営みなので、人数がたくさんいれば不心得者がいるのは、もうこれはしょうがないです。システムでどんなそれを締め出せるかといえば、これはもう無理だと思ってもらった方がいいです。別に、死刑があったって殺人はなくなりませんし、交通ルールがあってもやはりスピード違反に信号無視、一旦停止違反は出てくるものなので。むしろ、そこで問題が起こったらもうだめですというのは、研究者の中での倫理としてわきまえておくべきことで、それは確かに科学者のところで始末するべきことであつたし、それができない理化学研究所というところのシステムというのは、うまく作動していなかったんだろうというのがあります。

というの、もちろん、倫理教育なり内部規程なりがきちんとあるわけです。もしかするとそれは理化学研究所の責任だけではなくて、どこかお金をを出しているところからの横の口出しがあつたのかもしれないので、詳しいことまではわかりません。なぜS T A P細胞があるのか、ないのかという話になったのかというと、あそこで言っているのは、論文という形できちんと出してきたものの、実験データがほぼすべてに渡って信憑性に疑いがあった。というこ

とになれば、結局のところそれは、夢を言っても別に全然かまわない話になってしまいます。自分で今、「いや、これはもう間違いなくあるんだから」って言って、フォトショップで全部図を作っちゃっても、じゃあ「いや、言うことはきつと間違いないからいいんだろ」っていうふうにみんな信じるのか、という話になってしまいうわけです。ですから、そのところをきちんと切り分けられないというのは、やはり理化学研究というか、理科教育で何を必要とするのかっていうこと、今まで何が積み重ねられてきて教科書ができてくるのか、ということが伝わっていない。それから、先端領域の理化学の実験の論文というのは、いろんな人が確かめたわけではないから、それが正しいかどうかというのはまだ未確定です。よく理科教育や理系人材の特徴として、「計算すればすべて答えがわかると思っている」っていうような画一的な理解があるわけなんですけど、先端の世界にいる人になればなるほど、その答えというのがはっきりしていないということがわかるわけなんです。だから逆に言えば、教科書に載っている話というのは、何度も何度も追試が繰り返されてきたから間違いがないことであって、例えば実験をやって変な結果が出たらそれは何か間違いしていることに気づくべきなんです。

ですから、もっと遡って言えば、例えば相対論は間違っているということ、常に一定数の人がいるいろいろな本なり、インターネットなりで書くんですけども、それは結局のところ自分の立論がやっぱりおかしいんです。専門家が言っていることは間違っているというのは、専門家は実は間違っておらず、自分の立脚に必ず穴があるんですね。そういうところに気づけるような基盤をやはり作らなければいけないのではないか、というふうには思うわけです。

科学というのは、基本的には道徳ではないんですけれども、科学的な思考をしないと他人に迷惑をかけかねませんよ、っていうことも実はいくつもあります。それは何かといえば、例えば、インフルエンザに限りませんが予防接種のお話があるんですね。「インフルエンザの予防接種は効かないし、あれは薬品会社の陰謀だ」みたいなことを言う人もやっぱり少なからずいます。ただ、あれをやることによって何が良いか。例えば、百人の中に一人予防

接種を打っていない人がいても、その人はたぶんインフルエンザにはかからないんです。それはなぜかといえば、周りの人がみんなインフルエンザに対する耐性を獲得しているからです。ただ、みんながみんなインフルエンザのウイルスの予防接種を打たなくなれば、やはり全員インフルエンザにかかってしまう可能性が出てくるっていうことになっていくんですね。

だから、受けない人の数が増えれば増えるほど、例えば変異したタイプのウイルスにかかってしまうとか、その人の体の中でいろいろ変異が起こって、他の人にも感染しやすいようなインフルエンザになってしまふとか、そういうことがたくさんあるわけです。ですから、実は科学的にちゃんと根拠があることを疑って、そういうことをやらないと周りに対して迷惑をかける。ある意味、科学に対するリテラシー、冷静な考え方っていうのは、もう社会の常識としてほんとは取り込まれていかなければならないものも多々あるというのはあります。

もちろん民主主義社会というのが、今の日本には当然敷衍してゐるわけですが、ただこれは、ある程度きちんとして、物事を知っていることが前提なわけですね。間違つた理解で何かを判断するということは、その結果がいい方向には行かない可能性が高くなってしまふ。そんなふうであれば当然、先ほど片山先生が見たポピュリズムになってしまふなど、いいように世論の誘導に引かかってしまふ、過激なお話に走ってしまふ、全体主義みたいなところに行きかねないような世界になってしまふということもある。個人的には、受験の詰め込み教育を血肉化する方策っていうのは、きちんと作らないといけないんだらうというふうには思っています。

司会 古河理事長、よろしければ。

古河 グローバル人材の前に、片山先生のおっしゃられたローカル人材についてはたいへん共感を持ちます。社会貢

献ということは、今、大学の教育、研究とともに三つの役割の一つとして挙げられておりまして、それは即、国際社会ではなくて、やはり地域社会との連携、そういったところで活躍できる人材を育てていく。そういう意味でも大事なことだと思います。その上でグローバル人材について私が思うのは、片山先生のお話にも共通するんですが、語学ができるからグローバル人材ではないですね。「グローバル人材は語学ができなければいけない」ということは言えると思うんですが、さらに必要なことは、日本人のアイデンティティをしっかりと持っているかどうかということではないかと思います。先ほどの考える力、その他もありました。

私は、自分の立場から言えば、例えば異文化とか、人種の異なった世界、異なった習慣の地に行った人たちが、そこに住む人たちと関わるときに、きちんと自身の精神文化を持っていくべきだと思えます。そのためには法華經に説かれる慈悲心とか、他者のためになる利他の思想だとか、あるいは寛容の精神ですね。人を広く受け入れること。それから忍耐。ただ自分の主義主張だけを言うんではなくて、忍耐する。そして但行礼拝の相互尊重です。お互いに人間として敬い合う。こういう精神を持って外国で活躍してもらいたいと私は思っております。そういう意味では、グローバル人材の育成というのは語学研修と、もう一方は海外の舞台でどのような人格を持って働けるのか、活躍できるのかということを考えるべきではないかなと思います。

そういう点では大学も、それからお寺も人材育成の場でありまして、宗教もそうです。かつて江戸時代には寺子屋という機能がありました。お寺はまさに教育の場でもあったわけです。そういう点からしても、これから現代社会に、あるいは将来に向けてそういったお寺の教育的な機能というものも持っていきたいと思えます。

**司会** すいません、もう一つだけ司会者の権限を使わせていただいで各先生に御質問申し上げたいと存じます。古河理事長のお話の中に、「情報と発信」というキーワードがございました。これは片山先生のお話にも通じていくもの

だと思えます。また、八代先生のお話の中に、iPS研でも世論調査のようなものをしてながら、市民の考え方がどの辺りにあるかを探った上で、それを味方につけながら——という言葉が悪いかもしれませんが、研究をお進めになつていこうというような考え方があるのかなと、下衆の勘繰りで思ったりもいたしました。

どこから話しましょうか。今年四月に現宗研が五十周年を迎えました。去年の中央教研から五十周年を記念する企画を立てて活動してまいりましたが、今年の中央教研では人口減少問題を直に扱おうということで、「人口減少問題と寺院のあり方」をテーマに行いました。分科会をいくつか設けました中で、個人的には生命倫理の問題などを扱う分科会というのを設けたいと考えておりました。現宗研の科学技術担当チームは、去年は原発問題をテーマにしましたから、その警鐘を優先したというようなことがありまして、今回の五十周年のシンポジウムには理科系の方、殊に「できればiPS細胞等々の再生医療の問題について詳しい方に来ていただきたい」ということが、私の中にございました。

私の記憶に間違いがなければ、山中教授がiPS細胞の作成に成功したと発表された次の日、バチカンで、「iPS細胞、結構です」という声明が出ました。そのときにバチカンは「山中はわれわれの言うことを聞いてくれてあの研究をやってくれた。たいへん結構だ」という言い方をしました。つまり、山中教授がiPS細胞の研究をされてるということをおバチカンはぜひぶん前から知っていて、作成に成功される以前に、山中教授を招いてヒヤリングをやったことがあったようでございます。「ES細胞については問題視されていた」という話は、八代先生が先ほど講演の中でもしてくださいました。バチカンと日蓮宗と比べられるかというところとちょっと辛いところがありますし、現宗研がそれをできたかというところが大いに難しいのですが。私の知る限りでは、未だ仏教界で、「iPS細胞ならいいですよ」と言った教団もなければ、「ES細胞はまずいんじゃないの」と言った教団もないと思います。いわゆる生命倫理問題について、その辺のところをあまり語ってないといえますが、日本の仏教界の多くは、臓器移植等々の問題につ

てはコメントしたりはしているのですけれど、そのレベルで止まっている。と言うと、現宗研も何もできてない部分がありますから、言い方がまずいかもしれませんが、そういうようなところがあります。

では日本国はと言いますと、今さっき、国家が全面的にiPS細胞の研究を支援するような形でというお話でしたが、でも、この体制になったのはノーベル賞をお取りになってからですね。その前はまた、山中先生は研究費が足りなくて、研究費を集めるためにマラソンをされたりしておられました。そのようなことで、決して、常に潤沢な研究費を得ながら研究をされて来たというような状況ではなかった。だいたい、ノーベル賞をもらってから文化勲章をもらうという方が出てきたりするのが日本国の通例ですので、科学技術立国と言いながら、殊にサイエンスの分野について国家の情報力が弱いところがあるんだらうというふうに思います。

「情報と発信」ということをキーワードにしながら、国家レベルのことまで申し上げましたが、私のなまかじりの知識で申し上げていたことに間違いがありましたら、すみませんが訂正をしていただければと思います。八代先生には、iPS細胞の研究をさらに推進していくという中で、一般の方のリテラシーをどうやって高めるかとか、共感をどうやって得るようなことをお考えになられているのか。「いや、そういうことはあまり考えないでやる」というようなことなのか。あるいは、「もうすでに支持は受けている」という感覚でいらっしゃるのか、といったことを。片山先生には、もう一度戻しまして、日本はまだ国家として情報力が足りない、発信力も足りないというところが、今またまiPSの話为例に挙げましたが、それに限らず、諸々のことにあるような気がいたします。それについて、どのようにお考えか。古河理事長には、学園というよりは宗門ならびに寺院、現宗研の強化というようなお話もしていただきましたので、今度はその辺りのところをさらに補足していただいた上で、多分に情報力、発信力が不足しているというのが宗門の現状であり、あるいは現宗研も深く反省をしないといけないというようなどと思いませんか、その辺りに対する思い、お考えをお聞かせいただければと思います。では、八代先生からでよろしいですか。

八代 はい、ありがとうございます。先ほども僕は、「民主主義社会を知ることが大事だ」というお話はしました。先ほど出した世論調査っていうのは、文科省がやっていた「再生医療の実現化ハイウェイ」というお金で、倫理課題、今は「倫理的・法的・社会的問題」というふうに呼ぶことが多くて、「ELSI」と頭文字を取って言うんですが、その課題として、東大医科研の武藤香織先生たちと一緒にやった調査なんです。先ほども言いましたように、科学の話とかを社会にブリッジングする仕事というのもやっているので、今年度からは新しく、文科省のお金で、リスクコミュニケーション事業というのを再生医療学会でやっておりまして、受託をした私が実質責任者をやっています。ですので、結局、僕は再生医療研究をどんどん進めていきたいし、カメラ研究でもやったらいいと思ってるんです。ただ、いいことばかりを伝えていても仕方がないわけです。そういうのは、やはりリスクがあるということも知ってもらわないといけない。今の社会、文科省なんかが考えていたりするリスクのやり方っていうのは、先ほど原発の話が出ましたけど、わかってくださいねという形で、進めるために既成事実を作るためのコミュニケーションなんです。一応、第四期科学技術政策という中では、科学コミュニケーションとリスクコミュニケーションを進めなさいということが書かれていて、今、「サイエンスアゴラ」という事業を毎年、年一回、東京の科学未来館でやってるんですけど、そういうところでやってもなかなか、良い、楽しいところだけは見せるけれども、リスク、悪いところは伝えない。

だから、知ってもらって自分で判断する能力をつけてもらいたいっていうのが僕の考え方です。その上で指示してくれる人が過半数を超えてくれるのであれば、それがいいなと思っています。その中で、先ほどのような形で意識調査みたいなことはやって、ああいう形で「ネガティブな意見の方が強い」ということであれば、拙速に進めていいわけではないんです。僕はそれを、「じゃあ、どうやったら考えを変えてもらえるかな」という形で、カウンターとして情報を出していくことをやりたいなとは考えているんです。ですから、やっぱりきちんと情報は開示をする。

先ほどの片山先生からも政治の透明化という話もされました。自分たちが何を考えて何をしているのか、何をしたいのかっていうことは、すべてきちんと知ってもらった上で進めていくことが必要なんです。

なかなかこういう考えの人は少なく、「いいことだけ言ったりや、お金もらえるんだから」というふうに思う人が多いわけなんです。でもそれだと、今日、臨床研究の話もしましたけれども、例えば臨床研究っていうのは、患者さんからすれば医者から受けてるから治療だと思うんですが、治療効果が出ないっていうことになる、やっぱり訴訟なんかにつながるんですね。これがよく医療倫理で問題になってる、セラピューティック・ミスコンセプションっていうものがあるんですが、要するに、患者は期待をしてしまうし、参加してもらおうと医者もそれに迎合するようなことを言いがちであるっていうのが、どうしても傾向としてあります。ですので、そういうところは抑制をしなければいけない。

ただ、抑制はしつつも、少なくとも自分の立場からは、そういうことを進めていくための意識を作ってもらいたいというところで、著作を書くとか、先ほどのリスクコミュニケーションの事業など、そういうあらゆる形を使って情報発信をしていく。科学の研究もお金がかかるわけです。先ほど、ノーベル賞のときにお金の話もありましたけど、実は、もうちょっと前の二〇〇七年にヒトiPSができたときに、再生医療の実現化プロジェクトというやつの中に、がちよつと変わりました。ちよつど期が一期、二期で切り替わるときだったので、第一期が臍帯血、へその緒の中にある血なんかを使って白血病治療をしようっていう方がメインだったのが、iPS細胞中心に非常に速く切り替わった。それは文部科学省なんかがやることとしては異例の早さだったんですが、それもやはり根回しですとか、いろいろ細かいことをかなり綿密にやった上で進めてたことではあります。

そういうふうに急速に拡大した事業であるので、実はiPS細胞研究所というのは、いわゆる競争的資金、自分で申請書を書いてお金を分捕ってくるというのを八割でやっています。国立大学と違って、普通ああいうものという

のは、八割、九割が基本的には国からの経常資金が出ているんです。私大で言うところの私大助成ですね。なので、iPS細胞研究所にはたくさん教員はいるのです。二十五人、独立研究者は僕も含めていますけれども、その人たちの雇用資金がないという、十年たったら切れる可能性が高いっていうことで、寄付を募ったり、山中教授がマラソン走ったりというようなこともやっているわけです。

ですから、やっぱり社会との接点を無理やり作らなければいけない状況にもある、そういう意味においては、常に目にさらされるような状況下に置かれているというのは、やはり悪いことではないというところはあります。もちろん、それで研究が十年間で済むように縮小していくってこともあるのかもしれないけれども、世の中の考え方、意見、知識を日々耕しておくことで、途切れないようなお金を出してもらおう仕組み、スキームを作っていくのは、制作側に任せておいたのではなかなかおそろく厳しいので、科学者自らが動かなければいけないのだろうなというふうには考えています。

司会 ありがとうございます。片山先生、ではお願いします。

片山 今の八代先生のお話は、実は科学技術の分野に限らず、政治一般に言えることだと私は思うんです。例えば、新しい政策を打ち出すとき、それをぜひ実施したいので国民の皆さんの理解を得たいとかですね。今の科学技術の議論のある分野で新機軸を開くので、それについても国民の皆さんに理解してもらいたい。公共事業なんかでもそうです。何かの一つの公共事業をやるときに、できるだけ地域の住民の皆さんの理解を得るといって、これは、実は日本がすごく下手な分野です。理解を得る。社会統合もと言いますが、これが実に下手なんです。

何が不足してるかっていうと、やはり議論。お互い議論してみると「なるほど、そうだね」とか、「自分の考え方

が間違ってるとは思わないけど、あなたの言うことも一理あるね」と、「それなら、まあしょうがない」というところまで行かなくやいけないですね。議論がなければそういうプロセスがありませんから、いつまでたっても平行線というところで、議論なくピシャッと決めると一応決まるんですけど、結局得心してませんから決まったことにならないで、いつまでたってももうぐずぐずなるわけです。だから議論が必要。

議論をするためには情報を共有してないといけない。一方だけが情報を持っていて、他方は何も知らなかったら議論になりません。議論をするための情報共有ということは、情報公開、透明化ということになるわけです。これは実は、日本の政治システムの中ではすこぶる苦手なんです。何にせよ、だいたいこのことは結論をもう決めておいて、それで押し切る。議論をしてそれに変容を加えるという姿勢がないんです、権力側には。大体説明だけするんです。そして「もう説明したからいいでしょう」という。こういうことになると、なかなか理解に達しないわけです。

原発の再稼働についても、ほとんど議論らしいことはしてないです。地元でも。本当は反対意見があれだけあるんですから、きちんと議論したらいいと思うんです。不信とか、懸念とか、そういうものに対して、どれだけきちっと説得的に説明できるか。ここが問われるんですが、どうもそれがいいのかないという気がします。鹿児島県知事が「避難計画はちゃんとできているんですか」と聞かれて、彼は「そんなマイナーな話いいじゃないですか」と言っていました。マイナーじゃないんですね。そのことで、福島はすごく苦しんだわけです。だから、そういうのをちゃんと議論してからお互い共有できるところを共有していったら、合意に達するまでに時間と労力はかかりますが、「急がば回れ」だと思っただけです。

東京の小平市で、東京都が大きな都道を建設するっていう計画があったんですね。あつたというのか、今はもうそれを実行してるんですけれど。そうすると、せっかくの玉川上水のところの緑がなくなるからというので、反対運動が起きました。それで結果的に、そのことの是非を問う住民投票までやったんですね。その住民投票をしようとして市

民運動を起こした人たちが、最後にぼろっと言ったのは、「私たち、こんな大掛かりなことをほんとはしなくてもよかったんです」と、「意見を聞いてもらおう場所がなかったんです」って言うんですね。都道を建設する計画を進めようとする東京都は、「いや、ちゃんと説明しました」、「住民の理解を得ました」って言うんですけど、全然そういう理解に達してないんです。

なぜかという、都は確かに説明会をして、その人たちはそこに出かけたんだそうです。時間の大半は、都の作ったビデオを見せられました。そして質問しようと思ったら、「もう時間がありません」と。「説明会だと言うから行ってみたら、ほんとに説明しかしてくれませんでした」、「私たちの意見をぜんぜんくみ取ってくれませんでした」と。東京都の方はそれで、「ちゃんと説明したからいいじゃないか」っていうんですけど、出向いた側は何にもそんなのは共感を覚えてないわけです。どうしてもっと丁寧にちゃんと説明をして、疑問に答えて、その過程で情報も開示してということをやらないのか。それをやっていけば、あんな大々的な住民投票なんかにきつとなってないんですね。

なぜ議論や情報公開が苦手かという、だいたい全部に通底することがあるんですけど、決定する側に自信がないんだと思うんです。自信がないから隠す。隠せば不自信。日本の今の社会の社会統合っていう面から見たら、おおいなる欠陥を持っていると私は思います。私の専門で言うと、地方議会なんかがまさしくそうなんです。地方議会っていうのは本来、市民の広場であり、多様な意見が市民からも直接出てくるし、それを踏まえた議員の意見も出てくる。その多様な意見を踏まえて議論しながら決めていくところにポイントがあるんですけど、議論しないんですね。最初から、もう決めてかかっているんです。「この案件はこうやる」って決めてるんです。議論したふりをするんですけど、それは八百長ですから何の意味もないので、居眠りするか、野次をするかぐらいになっちゃうんです。「なんで東京都議会はあるのに野次が出てくるんですか」というと、彼ら、やることないんですよ。もう議論する前に決めてますから、議論なんか何にも意味ないんですね。野次ることぐらいしかやることがない。

だから、地方議会には何か変な議員がいっぱいぞろぞろ出ましたけど、あれは個人的な彼らの不功績ではなくって、実はもう構造的な問題があつて、議論しないんだからやることがないんです。小人閑居して不善をなすと言いますけど、これも、さっき私が縷々言いました、日本の社会の社会統合という面でのおおいな欠陥が、地方議会にも症状として現れているということだろうと思います。そこを変えなければ、五十年後の日本の社会は、透明で、闊達で、議論の中から物事がおのずから修練していく本来の民主主義の社会のあり方に近付いていかなんだろうなと思つてまして、私のライフワークは実はそこにあるんです。

司会 ありがとうございます。古河理事長、お願いします。

古河 今の主任さんの問いかけは、社会への発信ということでもよろしいですか。

司会 はい。

古河 はい。実は私が日蓮宗現代宗教研究所におりましたときに、仲間と日蓮宗医療問題研究会を作りまして、そこで生命倫理についていろいろと議論しました。とくに私どもの時代には、脳死臓器移植問題、それから安楽死、尊厳死の問題、そういったことをやっておりました。例えば原発問題に対しても、日蓮宗の宗会などでも少し発信はしております。それから、現宗研の方でも原発問題を取り上げて発信しております。そういうことはけっこうだと思えますが、日蓮宗の中に総合研究会というのがあつて、そこは伝道部と現宗研もカバーしてる会議ですから、本当は日蓮宗から発信するのは、そういったところで議論したものを発信すべきですけど、それもなかなか出てこないと思

います。例えば、先だってアメリカの二十九歳の女性が、日本で言えば安楽死だと思えますが、あちらでは一部、尊厳死と報道されて亡くなられました。つい昨日だかおととい、バチカンがこれを批判しました。そういうふうには、宗教者として今の社会問題に対してどういう姿勢で目を向けているのかを、やはり社会に見せていかなきゃいけない。そうしないと、社会と宗教とは断絶していて、社会問題にはまったく疎いお坊さんたちの集団、こういう目で見られがちです。

ですから例えば、お坊さんが法話をするときに、時事問題、社会問題を取り上げて、「宗門ではこういうふうに乗っている」、「日蓮聖人と法華経の教えではこう考える」ということを、むずかしいことだけど明快に発信していくということを訓練し、そして実践しなければいけないと思っております。

司会 ありがとうございます。大変申し訳ありません、そろそろお時間となって参りましたので、以上をもちまして、現代宗教研究所の創立五十周年記念シンポジウム、「五十年後の心を考える」を、終了ということにさせていただきます。ただければと思います。

それぞれの先生方には「五十年後の日本」、「五十年後の生命」、「五十年後の寺院」ということについて、たいへん示唆に富んだお話を承りましたが、司会の不手際で、「五十年後の心」というところに行きそこなった感がございました。片山先生が先だって日本記者クラブで講演をされていた動画がYouTubeに上がっておりますので、今日のために、拝見をしておりましたら、「地方は中央の言うことを聞いてたんじゃだめなんだ」と仰っておられました。地方は地方で、自分で考えて何をするかということを選択していかなきゃならないんだ、というお話でございました。今日は、心を考える力というものを、われわれが持つていかなければならないということについて、三先生の示唆に富んだお話をいただけたのではないかとということで、司会の不手際をご寛恕いただければと存じます。

これをもちまして当シンポジウムを終了とさせていただきます。三先生に盛大な拍手をお願いいたします。片山先生、八代先生、古河先生、どうもありがとうございました。